

「奥義としての御国」に関するたとえ話 ①

イエスは答えて弟子たちに言われた。

「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが与えられています。しかし、彼らには与えられません。というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。

わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また悟ることもしないからです。」

(マタイ 13 : 11~13)

はじめに

今月から、みやま集会では、イエスが語られた「たとえ話」について学びます。テキストは、フルクテンバウム博士の「メシア的バイブル・スタディ」シリーズの中から、「たとえ話」に係するものを選びました。

福音書の中には多くのたとえ話が記録されていますが、この学びでは、主要なふたつのたとえ話群を扱います。まず、マタイ 13 章、「奥義としての御国」に関するたとえ話群（九つ）、そしてマタイ 24 章と 25 章、大患難期に関するたとえ話群（6つ）です。

今、私たちは、神の国のプログラムから見ると、「奥義としての御国」の時代にいます。初臨のメシアが神の民であるイスラエル民族によって拒否された時から、この時代が始まりました。そして、この時代の終末は、「主の日」とも呼ばれる 7 年間の大患難期です。

大患難期を経て、次の時代（来るべき世）に移ります。それは、地上に建てられる「メシアの御国（メシアの王国、千年王国）」です。従って、「奥義としての御国」の時代は、大患難期の終了とともに終わります。

主要な二つのたとえ話群は、マタイ 13 章が今の時代を、マタイ 24 章と 25 章が今の時代の終末、大患難期を扱うものです。

たとえ話は、題材を当時の身近な生活シーンから取り上げているので、具体的な映像をイメージでき、何となくわかったような気になります。しかし、そこだけを読んで想像を働かせると、どのようにも解釈することができます。読み手によって十人十色の説明がでてくるのは、このためです。

イエスは、はっきりと言われました。イエスの弟子たちには「知ることが与えられている」。イエスは弟子たちに、そのたとえ話が何を意味するのか、教えてくださいました。また、そのようなイエスからの直接の解説がない場合は、旧約聖書でそれは何を意味しているのかを調べると、たとえ話を正しく理解することができます。

この学びの目的は、たとえ話を文脈に沿って読み、語られている意図を正確に把握すること、それによって、「奥義としての御国」の時代に生きる私たちが、今の時代をどう生きるべきか、信仰生活における平安と確信を受け取るためです。

「奥義としての御国」に関するたとえ話

	表題	たとえ話の聖書箇所	解説の聖書箇所
1	種蒔き	マタイ 13 : 3~9	マタイ 13 : 18~23 マルコ 4 : 13
2	種は自分で育つ	マルコ 4 : 26~29	
3	毒麦	マタイ 13 : 24~30	マタイ 13 : 36~43
4	からし種	マタイ 13 : 31~32	参考 マタイ 13 : 4、19 黙 18 : 2
5	パン種	マタイ 13 : 33	参考 マタイ 16 : 6~12
6	隠された宝	マタイ 13 : 44	参考 申 7 : 6
7	真珠	マタイ 13 : 45~46	参考 ダニ 7 : 2~3 黙 17 : 15
8	地引網	マタイ 13 : 47~50	参考 マタイ 25 : 31~46
9	家の主人	マタイ 13 : 51~52	

オリーブ山での説教 大患難期に関するたとえ話

	表題	たとえ話の聖書箇所	内容
1	いちじくの木	マタイ 24 : 32~35 マルコ 13 : 28~31 ルカ 21 : 29~33	メシア再臨の時期を確実に 予想できる事件=荒らす忌 むべきものが据えられる (その日から 1260 日)
2	門番	マルコ 13 : 33~37	大患難期において再臨を待 つ信者に対する励まし。
3	家の主人	マタイ 24 : 43~44	目をさましていること、備 えをしていること、主の働 きをしていることを勧め る。
4	忠実なしもべと悪いしもべ	マタイ 24 : 45~51	
5	花婿を出迎える十人の娘	マタイ 25 : 1~13	大患難期における異邦人 についての、信者と不信者 との区別。
6	主人の財産を預かるしもべ	マタイ 25 : 14~30	

奥義としての御国に関するたとえ話 インTRODクシヨN

1. テーマの内容
 - (1) マタイ 13 章の御国に関するたとえ話
 - (2) イスラエル民族がイエスのメシア性を拒否した直後に語られたもの
 - (3) マタイ 13 章のほかに、マルコ 4 章とルカ 8 章にもある
2. マタイ 12 章と 13 章との関係
 - (1) マタイ 12 章は、当時のイスラエル民族がイエスを悪霊に憑かれているという理由で、メシアではないと拒否した事件を記す。
 - ① イスラエルの指導者層が公式にイエスを拒否した事件
 - ② この時点で、当時のイスラエル民族の世代は、「赦されない罪」を犯したことになる。
 - ③ この時点以降、彼らにはメシアを拒否したことによる神の裁きが下ることになる。その裁きとは、紀元 70 年の裁きである。この年に、エルサレムとその神殿がローマ人によって破壊された。
 - (2) マタイ 13 章では、イエスは一連のたとえ話を教え始める。これは 12 章の拒否事件が起きた直後である。御国のたとえ話を理解するためには、この前後関係を理解する必要がある。
3. まとめ
 - (1) マタイ 12 章で、イエスは拒否された。イスラエルは、イエスを悪霊が憑いているという理由で、イエスをメシアではないと拒否した。
 - (2) マタイ 13 章では、まさにその拒否事件の当日、イエスは、たとえ話をもって群衆に教え始められた。

たとえ話の目的と御国のプログラム

1. マタイ 13 : 10~18 たとえ話を用いる目的について語られる。
 - (1) 10 節 弟子たちによる質問
 - (2) マタイ 5~7 章の「山上の説教」における聴衆の反応との違い
 - (3) 11~14 節 たとえ話を用いる教え方に変えた目的
 - ① イエスの弟子たちのために、真理を具体的に描いて見せる。
 - ② 群衆からは、その真理を隠す。
 - ③ メシア預言を成就する (イザヤ 6 : 9~10)
2. マタイ 13 : 34~35 たとえ話を用いることが再び強調される。
 - (1) 群衆からは、その真理を隠す。
 - (2) 預言の成就 (詩 78 : 2)
 - ① 旧約聖書の預言を成就することで、逆に、メシアであることを証明
 - ② 旧約聖書の預言では、メシアはイスラエルの民によって拒絶されること、メシアはイスラエルの民から真理を隠す、と預言されている。
3. 弟子たちには、たとえ話の意味が明らかにされる (マルコ 4 : 33~34)

4. マタイ 13 章以降、たとえ話による教えは、イエスが一貫して採用する教授法となった。
 - (1) イエスが群衆に語るときは、いつもたとえ話で語り、群衆からは真理を隠す。
 - (2) イエスは弟子たちとだけになると、ひとつひとつのたとえ話について、その意味を説明した。イエスによる解説を聴くまでは、弟子たちにも真理は隠されていたからである。
5. マタイ 13 : 11 マタイ 13 章のたとえ話群の目的は、御国の奥義を弟子たちに詳しく説明すること。
 - (1) マタイの「天の御国」と、マルコ 4 章やルカ 8 章の「神の国」とは、同じ。
 - (2) マタイが「天の」という表現を使うのは、ユダヤ人を対象に書いているから。
 - ① ユダヤ人は「ヤハウエ」はもちろん、「神」という言葉についても、口にするのを避ける。代わりに、「御名 (the name)」とか、「天」という言葉を用いた。
 - ② マルコはローマ人に、ルカはギリシヤ人に宛てて福音書を書いた。異邦人には、神という言葉についてユダヤ人のような感覚がなかったので、「神の国」という表現を用いている。
 - (3) 神の国、あるいは、天の御国とは何か？ひと言でいうと、「神の支配」である。
 - ① 神が主権的に支配する領域
 - ② 神の国のプログラムには、いくつかの違った側面がある。それらは、神の国の権威が及ぶ範囲に違いがある。しかし、共通している基本的な意味は、神が支配する、という点。
 - ③ 聖書は、神の国のプログラムについて至る所で啓示している。それらを一見すると、箇所によって語っている内容が違うように見えるが、それは矛盾ではなく、5 種類のプログラムがある。
 - A) 普遍的な御国 (永遠の御国)
 - B) 霊的な御国 (アダムから始まるすべての信者から成る)
 - C) 神政政治の御国 (モーセ、ヨシュア、士師たち、王たちを仲介者として神がイスラエルを支配した時代)
 - D) メシアの御国 (メシア的王国、黙示録では、千年王国)
 - E) 奥義としての御国・・・マタイ 13 章で初めて明らかにされた神の国
 - (4) イエスが新約聖書で初めて明らかにしたのは、「奥義としての御国」に関する神の国のプログラムである。たとえ話は、この「奥義としての御国」の時代における信者と不信者の区別、信者の心得などを教えるものである。

奥義としての御国に関するたとえ話 1 番目 「種蒔き」

1. 1 番目のたとえ話「種蒔きのたとえ」の重要性 (マルコ 4 : 13)

この 1 番目のたとえ話の意味を理解することが、その後続くすべてのたとえ話の理解につながる。
2. 1 番目のたとえ話「種蒔きのたとえ」 (マタイ 13 : 3~9、18~23)

3. このたとえ話の4つのポイント

- (1) この時代の特徴は、福音の種を蒔くということ。すなわち、福音宣教。この時代は、マタイ 12 章でイエスが拒否されてから始まり、大患難期の最後の数日にイエスが受け入れられて、時代終了となる。
- (2) この時代には、いろいろな異なる土壌が準備される。
- (3) この時代には、三方からの妨害がある。世からの、人の生まれながらの性質（肉）からの、そして悪魔からの妨害である。
- (4) この時代には、みことばに対する 4 種類の応答がある。特に、これが 1 番目のたとえ話で強調される部分である。

4. 4 種類の応答

- (1) 道ばたに落ちたという人々＝福音をはなから信じない人々＝不信者
- (2) 岩だらけの場所に落ちたという人々
 - ① 福音を聞き、それを信じる、それを受け入れる→信者であるから、救いを受けた人々である。
 - ② しかし、神のみことばに根差すことなく、霊的生活での安定に欠ける。彼らは教えの風に吹き回される人々。
 - ③ こういう人は、体験を求める傾向がある。しかし、自分の体験は上がったり下がったりする、その結果、彼らの霊的生活も上がったり下がったりする。
 - ④ そうなるのは、神のみことばに根差していないからである。信仰の中で安定する、ということをしなない。
 - ⑤ 救われてはいるが、本来は信者が結ぶべき実を結ぶことのない人々である。
- (3) いばらの中に落ちたという人々
 - ① 彼らも信者である。
 - ② しかし、この世の思い煩いを克服できない。彼らはこの世にせかされて、安定できない。
 - ③ 2 番目の岩だらけの場所に落ちた人々の場合は、神のみことばに根差していないから安定を欠いたが、いばらの中に落ちた人々の場合は、神学的知識もあり、聖書をよく読んでいるというケースが考えられる。
 - ④ こういう人は、体験重視ではない。むしろ、この世の心配事にかまけて、自分の人生を霊的のちと調和させることは難しいと感じている。つまり、自分には神と共に歩むという経験はできないと思っている。
 - ⑤ この世の心配事とは、家族のこと、経済的なこと、あるいは社会的関係のこと、など。
 - ⑥ 結果として、こういう人も安定を欠き、信者が結ぶべき実を結べない。
- (4) 良い地に落ちたという人々
 - ① 神を信じ、神のみことばに根差す人々である。
 - ② 彼らは、この世に打ち勝ち、その結果、霊的のちにおいて豊かに実を結ぶ。